



筑紫女学園大学リポジット

Nicknames and Word Formation Patterns : Categorical Processes of Naming

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 緒方, 隆文, OGATA, Takafumi メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/2

ニックネームと語形成：カテゴリー分析による命名プロセス

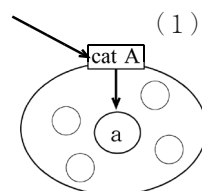
緒 方 隆 文

Nicknames and Word Formation Patterns: Categorical Processes of Naming

Takafumi OGATA

1. はじめに

本稿は緒方(2012)を補う論考になる。緒方(2012)ではカテゴリーを通して、固有名の命名プロセスを考察した。そこでの結論は命名には3つの要件があるとした。〈1〉カテゴリー特定、〈2〉成員特定、〈3〉カテゴリーラベルの力点推移(必須化)の3つである(cf. 2節)。命名は、何かを特定するために名付けを行う。そのため命名プロセスにおいても、(1)に示すような2段階の特定があると考えた。一つは指示物が属する最小カテゴリーの特定になる((1)ではcat A)。固有名は一見、カテゴリーと無縁に見えるが、実際はカテゴリーと強く関わる(cf. 2節、3節)。そのためまず指示物がどの最小カテゴリーに属するかが特定されなければならない。この特定をカテゴリー特定と呼んだ。さらに指示物が、カテゴリー内のどの成員になるかの特定が必要になる((1)ではa)。この特定を成員特定と呼んだ。つまりカテゴリーを参照点として、その中の成員を特定することで、指示物は命名されると考えた。この2つの特定は命名すべてにおいて必須要件であると主張した。



さらに普通名詞と固有名詞を考察し、両者の違いは、カテゴリーにおける力点の違いとした。つまり普通名詞は成員部分に力点があり、固有名詞はカテゴリーラベルに力点があると主張した。そのため普通名詞から固有名詞になる場合、カテゴリーラベルに力点が移ると考えた。

以上が簡略な命名の全体像であるが、緒方(2012)では上記〈1〉〈3〉の議論を中心に据えたために、〈2〉の成員特定については具体的な議論が少なく、ただ単に比喩のプロセスが関わりと述べるに留まった。そのため本稿では、〈2〉の成員特定をより具体的な事例により検証しながら、論じていくことを目的とする。ここでの結論は、命名のプロセスにはカテゴリーが強く関わっており、成員特定においては比喩のプロセス(同一化と焦点推移)が関わっていると主張していく。ここでの比喩のプロセスの考え方は、緒方(2011)をもとにしている(cf. 3節)。

さて考察対象であるが、成員特定のプロセスを示すためにまずニックネームをとりあげる。ニックネームはその多様性がゆえに、成員特定が比喩のプロセスであることを示すのに都合がいいからである。むしろ命名は、名詞に対する命名とは限らない。動作や様態などありとあらゆる場面で命名がおこる。何であろうと他と区別する必要が生じたとき、命名がなされる。本稿の立場は命名全般において、2つの特定(カテゴリー特定と成員特定)がおこると考える。その一つとして後半では、語形成に命名プロセスを応用適用していく。すなわち語形成にもまた、成員特定のプロセス、つま

り比喩のプロセスが働いていることを示していく。新語を造ることは、命名の一種であり、命名のプロセスが働くと考えられるからである。

以下の構成は次の通りである。まず2節で、命名プロセスの概略を見る。そこでは命名プロセスを説明するとともに、その土台となるカテゴリーについて見ていく。3節では命名に関わる比喩のプロセスを概観する。4節でこの比喩のプロセスを用いて、ニックネーム(あだ名)を考察する。そして5節でいくつかの語形成に命名プロセスを適用していく。

2. 命名プロセス

2.1 固有名命名プロセス3要件

本節では緒方(2012)で述べた固有名命名プロセスを概観する。固有名は、1つの指示物を特定する。そのため特定するプロセスが、固有名命名プロセス自体に含まれると考える。この〈特定〉にはカテゴリーが強く関わる。一見、固有名はカテゴリーと無関係にみえるが、固有名もまたカテゴリーと強い関わりを持つ。それが何か全く分からないものに対して、いきなり固有名がつけられることはない。常にカテゴリーの中で、つまり属性をふまえながら、1つの指示物が特定される。子どもの語彙習得においても、これを示す研究がある。Hall(1991)では2歳児に対して新規の固有名詞の解釈に関する実験を行った。固有名詞の解釈は指示物が見慣れたものかどうかに影響を受ける。名前が分かる動物に対して、新しい語が導入されると固有名として見なすが、一方、名前を知らない動物に対しては、固有名詞の文法フレーズで言われたとしても、カテゴリー名として解釈する傾向があるとしている。つまりカテゴリーを知っていれば固有名詞、知らなければ普通名詞と見なす傾向にある。命名にはカテゴリーが前提となっていると考えられる。属するカテゴリーを参照点にして、指示物が特定されるのである(cf.(1))。

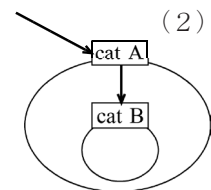
この考えにそった緒方(2012)は、固有名命名プロセスに、カテゴリーをもとにした2つの特定がなされるとした。図示したものが(2)である。

まず指示物が属する最小カテゴリー(cat A)が特定される[カテゴリー特定]。

次に指示物である成員が特性されるわけであるが、(1)と異なり、指示物がカ

テゴリーになっている。というのも命名では、指示物を主観的にカテゴリーと見なすことで成員特定がなされるからである(cf.3節以降)。指示物はたとえそれが個体であっても、主観的にカテゴリーとみなされたとき、カテゴリー扱いとなる。よって(1)を修正し、指示物はカテゴリー表記されている(cat B)。カテゴリー特定によりcat Aが参照点となり、成員特定により指示物(cat B)が特定される。

これを具体例で見ていく。カテゴリー特定における最小カテゴリーは言語化される場合とされない場合がある。言語化された最小カテゴリーが、(3a,b)の下線部分に相当する。(3a)では百合がカテゴリーをさし、(3b)ではその種類、つまり何のカテゴリーかの情報が固有名に含まれている。このカテゴリーは参照可能な最小カテゴリーであって、参照不可能なカテゴリーは最小カテゴリーとならない。一方最小カテゴリーが言語化されない場合もある。それが(3c)の例で、最小カテゴリーは含意されるが言語化されていない。これは最小カテゴリーが周知されており、他種類と区別するために、固有名に明記する必要がなくなっているからと考えられる*¹。



(3) a. 姫百合、鬼百合、山百合、黒百合、車百合

b. 三鷹市、青梅街道、三井銀行、小平市立第三中学校、松屋旅館、武蔵小金井駅、西海酒店

c. 花春(酒)、白銀(かまぼこ)、ほととぎす(ユリ科植物)、関取(大麦) (森岡 1977: 209)

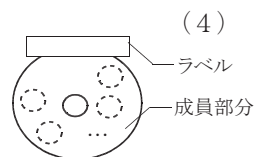
さて次に成員特定であるが、これはカテゴリー内の指示物の特定になる。(3a,b)の下線以外の部分、そして(3c)が成員特定部分になる。成員特定にあたっては、カテゴリー名にしばられないため、命名にかなりの自由度が認められる。もっと言えば比喩のプロセス(同一化と焦点推移)によって自由に生成される(cf. 4節、5節)。この2つの特定(カテゴリー特定と成員特定)によって、固有名ひいては「モノ」に命名がなされる*2。

「モノ」の名前は通例、普通名詞と固有名詞に分けられる。しかし固有名詞と普通名詞は連続しており、普通名詞から固有名詞に、固有名詞から普通名詞に変わることは普通に行われる。そこで固有名詞の命名を考えると、そのプロセスにおいて普通名詞と何が違うかを示す必要がある。緒方(2012)では、その違いはラベルへの力点推移だとした。カテゴリーは、ラベルと本体部分(成員部分)からなる。この2つは両方が必須要素ではなく、普通名詞では成員部分のみ必須で、固有名詞ではラベルのみ必須になる(cf. 緒方 2012)。つまり固有名ではラベルが重要な意味を持つと述べた。ただし本稿では、この力点推移は扱わず、成員特定に集中して話を進めていく。

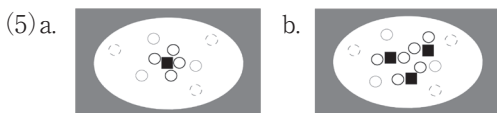
これら3つ(2つの特定とラベルの力点推移)は、固有名の3つの必須要件となる(詳細は緒方 2012)。固有名命名プロセスには、カテゴリーが深く関わっている。本論ではこの考えに沿って、ニックネーム及び語形成を、命名プロセスの中で、成員特定の部分に焦点をあてて考察していく。その前準備として次節でカテゴリーを見ていく。

2.2 カテゴリー

カテゴリーは境界を持ち、他と区別される〈集合体〉である。カテゴリーは広く認知されているものから、その場限りの一時的なものまである。またカテゴリーの結束度にも違いがあり、ゆるやかな集合体もあれば、強く結びついたものもある。ここでは個体であっても様々な成員(属性)を持つと主観的にみなされるとき、カテゴリーとみなす(以下、個体カテゴリーと呼ぶ)。カテゴリーは基本、カテゴリーラベル(以下ラベル)と成員部分から構成される。名前はカテゴリーのラベル部分に相当する。固有名の場合、ほとんどが個体カテゴリーのラベルになる。ラベル(名前)を付けるプロセスが命名のプロセスになるが、それは単独で行われるのではない。常に本体の成員部分、あるいは他のカテゴリーと関連を持ちながら、命名のプロセスはおこる。そこで本稿が考えるカテゴリーを簡略に説明する。



まずカテゴリーの構造を考えたい。カテゴリーは何らかの根拠で集められた集合体である。根拠とは、カテゴリーを特徴付ける特質である。これが磁石のように、その特質を持つ成員を強く引き寄せて集合体をなす。単純な形で示したものが(5a)である。白い楕円部分がカテゴリーで、その中に特質(■)があり、その特質をもつ度合いに応じて成員(○)が配置される。中心に成員があれば、中心的成員であるし、中心から離れれば周辺の成



員(破線の○)となる。ここにはプロトタイプ効果が存在する。しかし通例はカテゴリーの特質は複数個、もっといえば数多くあり(5b)のように散らばっている。このときこれら特質にも、中心的特質と周辺的特質がある。中心的特質ほど、カテゴリーの中心に配置される。中心的特質とは、そのカテゴリーを強く特徴付ける特質になる。つまり特質にもプロトタイプ効果が存在する。

しかしここで問題が生じる。クワインの謎ともよばれるガヴァガイ問題である(Quine 1960, 1969)。ガヴァガイ問題とは、単語の意味を学習するとき、その情景に関わる情報は膨大であり、その中からどれに注目し、どれを意味とするかは莫大な可能性がある。その中から1つを特定し、単語の意味を学習することは極めて困難であるという問題である。つまりどの特質が中心的特質か判断できず、誤った成員をカテゴリーの中に入れてしまうという問題がある。カテゴリーは作られるものであるが、中心に置く特質が定まらなければ、また人によって大きく異なるのであれば、カテゴリー自体が成り立たない。そのため別の視点からの考察が必要になる。

本稿ではそれは前景化と背景化の視点と考える。前景化とは、この場合、中心的特質に焦点が当たることである(cf.(5))。同様に中心的成員にも焦点があたり前景化される。しかしこの前景化だけでは、問題が2つ生じる。一つは、特質は多数あるのに、ある特質がなぜ中心的特質になるのか分からない。これはガヴァガイ問題に通じる問題である。もう一つはカテゴリーの境界線が定まらない。中心は分かるが、どこまで周辺の成員がこのカテゴリーに属するか判断できない。

これを解決するために、背景化が必要となる。カテゴリーはそれだけで単独で存在しているわけではない。個々のカテゴリーは体系化された全体の一部を担っている。カテゴリー同士が相互作用しながら、いわば自分のなわばりを定めている。つまり境界を定めるには、他カテゴリー成員を背景化することが必要なのである。当該カテゴリーに入らない成員が分かれば、あいまいであっても、境界は定まってくる。この背景化が定まれば、前景化される中心的特質も定まる。他成員(他カテゴリー)と、当該成員(当該カテゴリー)を区別する際に、弁別性が高いものが中心的特質となるからである。この場合、背景化されるのは同列の他カテゴリーになる。この背景化と前景化のプロセスは、文脈の変化、使用の変化に応じて絶えずおこり、カテゴリーそれ自体は流動的にその中身を変えていると考えられる。それにも関わらず一定の安定性を保つことができるのである。

これを言語習得の観点から見れば、語の獲得も同様に説明がなされる。例えば子どもは語を理解するとき、たった一度だけ語が使われるのを見て、即座にその語の正しい概念と対応付けを習得することがある(即時マッピング)。これはまず既知の同列カテゴリーと比較し、他カテゴリーを背景化する。これと同時に、他カテゴリーと異なる弁別性の高い特質が中心的特質に選ばれるため、即時に語のカテゴリーを理解することができると考えられる。ここでは最初の問題、ガヴァガイ問題は起こらないのである。この問題は、カテゴリーを単独のものとして見ていることから起こる問題である。どの特質が中心的特質になるかは、他カテゴリーとの関連で、もっと言えば背景化と前景化によって、自然と定まる。よって〈yuki〉という語が使われるのを聞いて、白いものすべて(無生物含む)を〈yuki〉と言うなどと思わないのは、そうした同列カテゴリーがないからである。

またカテゴリーの生成後であっても、様々な要因によって、その内容が変わることも説明できる。つまり背景化する他カテゴリーが変化したり、前景化される中心的特質/成員が変われば、それに

応じてカテゴリーもまた変化するからである。語解釈の訂正も同様に説明される。例えば、赤ちゃんが「イヌ」という言葉を、4本足の動物すべてに適用していたとする。この場合中心的特質(■)は4本足かつ動物になる。しかし「ネコ」という言葉を習得し、4本足の猫を指すことを知れば、背景化されるものが変わり、弁別性の高い異なる特質が中心的特質となる。前景化と背景化の仕切り直しは、絶えず起こることで、語のカテゴリー理解の精度が高まっていく(cf. 今井・針生 2008)。

ここで固有名の命名に戻りたい。固有名はその指示物が属するカテゴリー内の他成員と区別するために命名される。つまり他との弁別性が高いものが中心的特質に据えられ、ラベルと置き換わる。例えば臣籍降下により「源」姓が多くなったとき、系図を廻り突きあたる天皇名をつけて区別した(嵯峨源氏、仁明源氏、文徳源氏など)(奥富 2004: 56)。このように苗字において、何を言語化するかは、弁別性の高い特質が選ばれる*3。つまり他カテゴリーとの比較において、中心的特質が決まり命名に反映されるのである。本稿では成員レベルの特定が、比喩プロセスを用いていることを示すことを目的の一つとする。そこで次節で、本稿が考える比喩のプロセスを見る。

3. 比喩のプロセス

3.1 比喩パターン

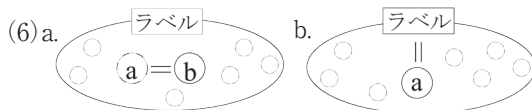
本稿では成員レベルの命名プロセスは、比喩のプロセスであると主張していく。ただし比喩のプロセスとは、緒方(2011)で述べたものを用いる。緒方(2011)では、比喩表現(メタファー・シミリ・メトニミー・シネクドキ)をカテゴリーの観点から考察した。そこでの結論は、比喩とは置き換え表現の一種であり、別々のものを同じとみなして(同一化)、より目立つ方に表現を置き換えたものと見なした(焦点推移)。つまり比喩とは、2つのプロセス(同一化と焦点推移)によって成立すると述べた。この2つのプロセスは、カテゴリーと関連づけられながら起こる。以下命名と関わるところのみ簡潔に概観する。

比喩はカテゴリーにおける2つのプロセス(同一化と焦点推移)と述べたが、関わるカテゴリーの数によって大きく2つに分けられる。カテゴリーが1つ関わる〈Single CF (単一カテゴリー比喩)〉と、2つ以上関わる〈Plural CF (複数カテゴリー比喩)〉がある。メトニミー、シネクドキがSingle CFに、メタファー、シミリがPlural CFに大まかに対応する。

まずSingle CFから見ていく。Single CFの場合、カテゴリーが1つなので、同一化は、成員同士でおこるか(成員aと成員b: (6a))、成員とラベルの間でおこる(成員aとラベル: (6b))。同一化によって、2つは同じとみなされるので、より目立つ方に焦点が推移する。つまり同一化された目立つ方に、表現が置き換えられる。

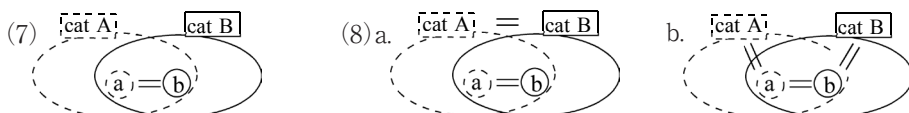
具体的に考えたい。(6a)でいけば、例えば「私はドムブリが好きだ」では〈どんぶりの中の料理〉を〈どんぶり〉に置き換えている。

隣接した成員の中で、より目立つ〈どんぶり〉に焦点推移することで、料理が「どんぶり」と表現されている。(6b)では2種類の焦点推移がある。一つは〈上への焦点推移〉で、ラベルと成員aが同一化した後で、成員aからラベルへと焦点推移し、成員aをラベルで表現する。例えば「花見に行く」では〈桜〉と〈花〉が同一化され、成員〈桜〉からラベル〈花〉へと焦点推移し、〈桜〉を〈花〉で置き換えて表現する。もう一つは〈下への焦点推移〉で、ラベルと成員a



が同一化した後で、ラベルから成員 a へと焦点推移し、ラベルを成員 a で置き換えて表現する。例えば「今日のご飯は何」では、〈食事〉とその一部である〈ご飯〉が同一化され、〈食事〉からより目立つ〈ご飯〉へと焦点推移し、〈食事〉を〈ご飯〉で置き換える。まとめると、Single CFには、(6a) (成員間の横の焦点推移) と、2つの(6b) (〈上への焦点推移〉と〈下への焦点推移〉) の計3つの比喩が存在する。

次にPlural CFを見ていく。Plural CFでは複数のカテゴリーが(7)のように重なる*⁴。重なった共通部分では、互いの成員間で同一化がおこる。つまり異なるものを同一視する。この成員間の同一化が引き金となり、同一化及び焦点推移がカテゴリーラベルへと波及する*⁵。これには2パターンあり、1つは(8a)にあるように、成員間の同一化がひきがねとなり、ラベル間でも同一化がおこり、いずれかあるいは両方で焦点推移がおこる(〈横の焦点推移〉)。この例として、「議論(cat A)には土台(b)が必要である」などがある。もう一つは(8b)にあるように、各成員がそのラベルと同一視され、ラベルに焦点推移する(〈縦の焦点推移〉)。例えば「彼(cat A)はまるでアメリカ人(cat B)だ」などがある。よってPlural CFは横の焦点推移と縦の焦点推移の2通りがあることになる。



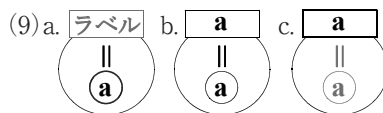
なおこうした比喩が固定化し、いわば比喩らしさがなくなることがある。例えば筆箱・下駄箱は典型的な成員がSingle CFにより成員特定部分のラベルとなった。しかし筆や下駄はもはや典型成員ではなく、表現だけが固定している。こうした固定表現を死んだ比喩と呼んでいく。そこでは同一化及び焦点推移のプロセスが感じられなくなっている(この場合のスキーマは緒方 2011: 125)。

これは命名においてもそのままあてはまる。基本命名が終わった段階から、死んだ比喩化が始まる。実際、その成り立ちを聞かなければ分からない名前(ラベル)の方が多いとさえ言える。とはいえ命名プロセスが分かりやすかったり、命名の由来を知っていれば、容易に命名プロセスを再現できる。これも普通の比喩と同じである。命名のプロセス(2つの特定化)は命名時には必須であるが、それ以降は個々の名前の透明性に違いはあるが、死んだ比喩へと進んでいく。

3.2 命名における比喩パターン

3.1節で比喩は、(1) カテゴリーの数によりSingle CFとPlural CFの2つに分けられること、(2) Single CFには3種類、Plural CFには2種類の比喩パターンがあることを示してきた。しかしながら命名においては、これらすべてのパターンが存在するわけではないし、やや特別な形で関わってくる。というのも名前はカテゴリーラベルに相当する。よって命名における比喩は、ラベルが関与しなければならないし、ラベルに焦点があたらなければならない。この2つの観点から比喩パターンを考える。まずSingle CFであるが、[成員間の横の同一化及び焦点推移](6a)はラベルが関与しないため除外される。また[成員・ラベル間の縦の焦点推移](6b)であっても、〈上への焦点推移〉も基本起こらない。というのも〈上への焦点推移〉とは、上位カテゴリーへの置き換えである。上位カテゴリーであれば、その特性は同列の他成員にも共通する。つまり誰/何を指すか分からなくなってしまう(弁別性が低い)。個別に特定するために命名するのに、上位カテゴリーのラベルでは、役

に立たない。例えば〈日本人〉などは、その属性を持つ人同士では共通する特性であり、名前(ニックネーム)として用いられることはない。また〈下への焦点推移〉であっても問題が生じる。確かに特性をとって、命名することはごく普通に行われる。そのためこのプロセスは命名にある。しかし特性はあくまで成員であってラベルではない。最終的にはラベルに焦点があたるのに、このままではラベルは成員を表さず、異なっただまにある。よって成員に焦点が推移した後(9a)、同一化により〈連動〉してラベルが成員名になり(9b)、ラベルに焦点が当たり直す(9c)という操作があるとする。この操作を連動推移と呼んでいく。この操作は通例の比喩にはなく、命名に特有といえる。



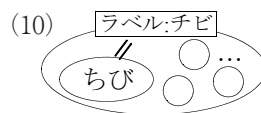
次にPlural CFであるが、(8)の同一化・焦点推移をへて、媒体のラベル((7)のcat B)に焦点があたる。もっと言えば、媒体ラベルのみに基本焦点があたる。というのも命名では短い形で、しかも分かりやすい形で何に喩えるかを示さなければならない。それに適したものが媒体ラベルなのである。しかしここでも問題が生じる。命名は、あくまで喩えられるもの(主意(tenor))のラベルに対して行われるものである。そのためそのままでは、主意ラベルはもとのままで変化がない。そこでここでも連動推移が起こると考える。(8a)では直接的、(8b)では間接的にcat Aとcat Bが同一化される。この同一化により両者が〈連動〉して、cat A(主意)のラベルがcat Bと同一のものになる。そして、cat Aのラベルに焦点があたり直すと考え(連動推移)。このとき主意ラベルが媒体ラベルと同じになる。ただしPlural CFの場合で、連動推移の候補が複数ある場合は衝突がおり、連動推移が起らないこともある。以上まとめると命名は、比喩のプロセスのうち特定されたパターンのみを用いる。Single CFでは、〈下への焦点推移〉のみ、Plural CFでは、媒体(vehicle)となるcat Bのラベルへの焦点推移のみと、計2パターンしかない。このとき命名はラベルが関わるため、連動推移という操作が働くことを述べた。このことを次節でニックネームを通して示していく。

4. ニックネーム(あだ名)

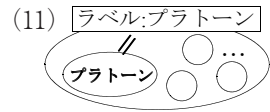
4.1 基本パターン

命名にはカテゴリー特定と成員特定があるが、特定される最小カテゴリーは〈ニックネーム〉であり、ニックネームの中に言語化されない*6。よって成員特定のみここで考察する。成員特定の命名プロセスは、比喩のプロセス(同一化と焦点推移)になると3節で述べた。ニックネームはこのことを示すのに、その多様性ゆえに適している。ただし他の命名でも同じ原理が働くと考える。

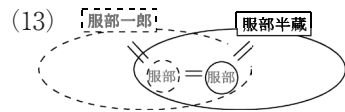
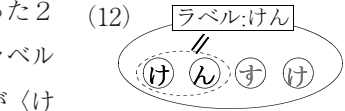
まずカテゴリーが1つのSingle CFでは、[縦の焦点推移]のうち〈下への焦点推移〉のみが存在する(cf. 3.2節; (6b))。特性(成員)とラベルが同一化し、成員である特性に焦点推移し、連動推移でラベルが特性に置き換わる。つまり特性がニックネームとなる。この特性は、他のカテゴリーと区別しやすい弁別性の高い特性であり、個性が高い特性となる。例えば「チビ」の場合、その人の特性の1つにすぎないが、他との弁別性が高く目立つため、あだ名となる。この場合、ラベル(個人)と特性(ちび)が同一化し、特性(ちび)に焦点推移する。その後、連動推移によりラベルが「チビ」となる((10))。また一回限りのイベントによるあだ名でも同様のことがおこる。例えば世界史の先生が授業中に、



映画の「プラトーン」を観て泣いたよと言いながら涙ぐんだために、あだ名が〈プラトーン〉となったとする(河上 1992: 444)。この場合世界史の先生に関わる集まり(フレーム的カテゴリー)の中から、プラトーンが選ばれ、同一化と焦点推移がおこり、連動推移によりラベルが〈プラトーン〉となる((11))。さらに特性は属性だけではない。読みの一部をつけることもある。例えば「健介」なる人のあだ名が〈けん〉とする。この場合4文字のうち、弁別性の高いあるいは目立った2文字〈け〉〈ん〉のみに焦点があたりゲシュタルト化する。これがラベルと同一視され、下への焦点推移がおこり、連動推移によりラベルが〈けん〉となる((12))。このようにカテゴリーの種類に違いはあるが、命名のプロセスは同じといえる。Single CFにおいて、縦の同一化・焦点推移がおこり、連動推移によりラベルが特性と同じになり、あだ名となる。

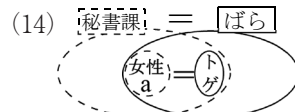


次に複数カテゴリーが関わるPlural CFを見ていく。ここでは成員間の同一化、媒体ラベル(cat B: vehicle)への焦点推移の後、連動推移により指示物のラベルが媒体ラベルに置き換わり言語化される(cf. 3. 2節)。まず縦の焦点推移から見ていく。文レベルでは、焦点推移があるかないか、焦点そのものがあたるかどうかで、メタファーとシミリで各々8通りずつある(緒方 2011: 122)。しかし命名では基本、その内の1通りだけとなる。cat Bへ焦点推移し、かつcat Bのみに焦点があたるパターンである。例えば、服部一郎という名前の人が、苗字が同じということで服部半蔵というあだ名がついたとする。この場合、成員(名前の一部)が同一化され(服部=服部)、それと同時に成員とラベル間で同一化が各々おこる(服部一郎=服部、服部=服部半蔵)。そしてcat Bのラベル〈服部半蔵〉へ焦点推移し、これのみに焦点があたる((13))。服部一郎と服部半蔵は、服部という



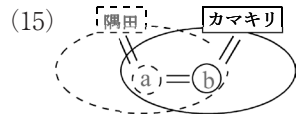
属性を通してゆるやかに同一化されているので、連動推移により、服部一郎のラベルが〈服部半蔵〉に置き換わる。しかし服部一郎と服部半蔵が全く同じと見なしているわけではない。連動推移がおこることで服部一郎のラベルが、服部半蔵に置き換えられているにすぎない。

次に横の焦点推移であるが、これは成員同士の同一化がラベル同士の同一化をひき起こし、焦点推移するものになる。成員同士は、構造、状態、関係、行為などで結びつくことが多い(cf. 緒方 2011)。焦点推移は成員間、ラベル間2箇所でおこるため、推移先のラベルと成員の両方が現れることができる。例えば、秘書課の中でとても性格がきつく辛辣なことばをいう女性がいたとしよう。その人のあだ名が「ばらのトゲ」とする。ここではラベル(秘書課=ばら)、成員(その女性=トゲ)となっている。成員とラベル(秘書課と女性、トゲとばら)が同一化しているわけではない((14))。連動推移により秘書課や女性aが、ばらやトゲとなり、この2つがゲシュタルト化する。これが女性aの成員となり、さらにSingle CFによりあだ名となる(cf.10))。まとめるとSingle CFでは〈下への焦点推移〉が1種類、Plural CFでは〈縦の焦点推移〉〈横の焦点推移〉の2通りあり、全部で3通りの比喻パターンが、命名における基本パターンとなる。次節でこれらが複合的に働くパターンを見ていく。



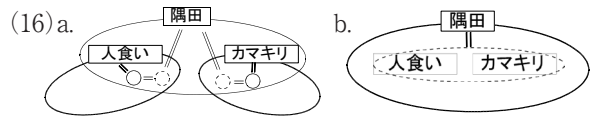
4.2 複合パターン

複合パターンをみていきたい。まずは複数のカテゴリーが重なり、Plural CFとSingle CFの両方がおこるものがある。例えば芸能人有吉が隅田という芸人につけたあだ名「人食いカマキリ」を考える。まず単純なあだ名から考える。隅田はほお骨がせり出しているため容姿がカマキリに似ている。そのため「カマキリ」とあだ名がついたとする。この場合、(15)のように1重の重なりとなる。成員同士(見た目)で同一化がおこり(a=b)、成員とラベルが同一化する(a=隅田, b=カマキリ)。焦点推移の後、カマキリの方に焦点があたり、連動推移により隅田のラベルがカマキリと置き換わる。そしてあだ名が「カマキリ」となる(Plural CF: (13)と同じプロセス)。



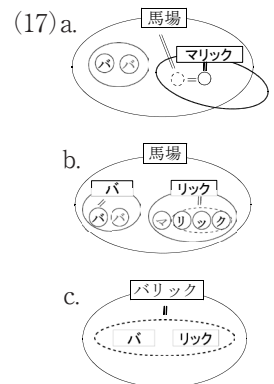
次に「人食いカマキリ」の場合、まず(16a)のように〈人食い〉と〈カマキリ〉が隅田と重なる。容姿でカマキリに似ていて、雰囲気は〈人食い〉と似ているため、各々成員部分で同一化がおこる。そして各々ラベルへと焦点推移がおこり、〈人食い〉〈カマキリ〉のみに焦点があたる(Plural CF)。しかし(15)と異なりこの2つは、上位ラベル〈隅田〉と置き換わらず、成員の一つ(特性)として留まる。つまり連動推移がおこらない。連動推移する候補が複数あるため衝突がおこるからである。

次に(16b)に示すように、両成員に焦点があたりゲシュタルト化し(破線の楕円)、焦点があたる。縦の焦点推移及び連動推移により、ラベル(隅田)が〈人食いカマキリ〉と置き換わる(Single CF)。



Plural CFとSingle CFが連続して起こっている。

この組み合わせは、さらに複合的になることもある。例えば本名は馬場であるが、マジックが得意であることからMr.マリックとかけて「バリック」とあだ名がついたとする(河上 1992: 445)*⁷。この場合、まず名前の音である〈ばば〉が活性化され、それと同時に成員間の同一化(マジックが得意)によって、ラベル〈マリック〉に焦点推移する。〈ばば〉が活性化されていることもあり、〈マリック〉はラベルと置き換えられずに、フレーム的カテゴリー〈馬場〉の成員の1つに留まる((17a): cf. (16a))。そして名前の音とマリックの音が各々カテゴリーとなり、その中で目立つ要素〈バ〉と〈リック〉がSingle CFによりラベルが置き換わる((17b): 縦の焦点推移)。さらに〈バ〉と〈リック〉がゲシュタルトをなし、上位の本人のラベルと置き換わる((17c): 縦の焦点推移; 連動推移)。よってPlural CF(1回:(17a))、Single CF(2回:(17b))、Single CF(1回:(17c))で、計4つの比喻プロセスが起こる。これは一例にすぎないが、Single CFとPlural CFの2つの道具で、様々なニックネームを生み出すことが可能となる。

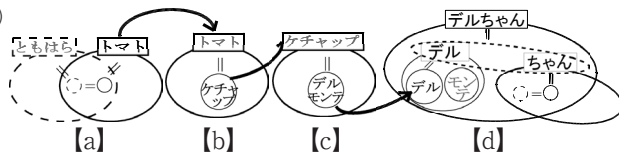


また転々と移っていくものもある。例えば「デルちゃん」というあだ名がある(河上 1992: 445)。これは「ともはら」さんのことで、「ともはら」を早く言う「トマト」に聞こえることから発展し、「トマト」→「ケチャップ」→「デルモンテ」→「デルちゃん」となった。このあだ名の生成プロセスを図示したものが(18)になる。【a】で発音で同一化がおこり、「ともはら」が「トマト」に置き換わる。【b】

ではフレーム的カテゴリー[トマト]が立ち上がり、その成員〈ケチャップ〉に焦点推移する。【c】ではフレーム的カテゴリー[ケチャップ]が立ち上がり、その成員〈デルモンテ〉に焦点推移する。【d】は、ともはらの個体カテゴリーになる。【c】までの過程をふまえ(デルモンテ)が成員の1つとなっており、音でめだつ成員[デル]とラベルが同一化し、ラベルが〈デル〉に置き換わる(Single CF: (12)と同じプロセス)。次にともはらも持っている特質と、「ちゃん」も持っている特質が合致することから同一化・焦点推移がおり、ラベルが〈ちゃん〉へと置き換わる(Plural CF: (13)と同じプロセス)。そしてこの2つのラベルがゲシュタルト化し(破線の楕円部分)、これとラベル(ともはら)との間で同一化・焦点推移がおり、

(18)

連動推移により上位ラベルが「デルちゃん」となる(Single CF: (17)と似たプロセス)。



以上、ニックネームの成員レベルの命名プロセスを見てきた。成員レベルでは比喩のプロセス(同一化と焦点推移)が働いており、ラベルが関与することから連動推移が起こることを示した。カテゴリーの数、焦点推移の仕方によりヴァリエーションが生じ、さらには複合的なパターンもあった。この命名プロセスを次節で語形成への適応が可能かどうかを考察していく。

5. 語形成への適応可能性

新しい語を生み出すことは、新しいカテゴリーラベルを生み出すことでもある。そのため命名の一種と考えることができる。よって4節までで述べてきた命名プロセスを、語形成に適用していく。ただしここでは名詞を中心に考えていき、動詞・形容詞・副詞が関わるものは基本考察しない。

5.1 複合(Compounding)

まず内部に主要部を含む内心複合語を考える。例として、(19)のような例がある(下線は著者)。

(19) a. city life, pencil sharpener, shooting star, blackboard, late-bloomer

b. 都市生活、鉛筆削り、流れ星、遅咲き (影山 1997: 72)

内心複合語の場合、〈成員特定〉+〈カテゴリー特定〉の構成と考えられる。つまり主要部がカテゴリー特定部分であり、最小カテゴリーを表す((19)の下線部分)。(3a,b)の姫百合や三井銀行と同じ構造と言える。一方主要部以外が、成員特定部分であり、基本Single CFから生成される。例えば都市生活の場合、都市が成員特定部分で、生活がカテゴリー特定部分になる。成員特定部分では、カテゴリーの成員の一つ〈都市〉がラベルと同一化・焦点推移し、連動推移によってラベルが〈都市〉に置き換わる(cf.(11))。これにカテゴリー特定部分が加わり、〈都市〉+〈生活〉となっている。

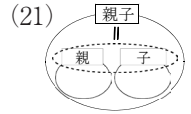
一方主要部を内部に含まない外心複合語の場合、最小カテゴリーが言語化されておらず、成員特定部分のみになる。(3c)の花春(酒)などと同じ構造をしている。この場合はニックネームで見たように、様々なパターンが考えられる。例えばredcap(駅のポーター)、greenback(ドル紙幣)などがある。redcapで説明すると第一段階として、内心複合語のプロセスが働く。つまり最小カテゴリーcapがカテゴリー特定され、言語化される。成員特定では、属性である成員(red)とラベルが同一化・焦点推移し、連動推移によりラベルが〈red〉になる(Single CF)。両者が組み合わせたり、redcapができる。ここまでの内心複合語のプロセスになる。第2段階として、redcapがポーターの目立つ成員

とみなされる。成員とラベルが同一化・焦点推移し、連動推移によりラベルがredcapとなる (Single CF)。ここでは、内心複合語より操作が増えており、より複合的になっている。

また複合語を構成する2つの構成要素がともに主要部となる並列複合語がある。

(20) 親子、男女、制止、日米、寝起き、出入り、左右、南北、慶弔 (影山 1997: 76)

これらは(21)のようなプロセスになる。カテゴリー特定部分は言語化されないため、(21)は成員レベルの特定をさしている。2つの異なる成員のラベルがゲシュタルト化し、ラベルと同一化する。そして焦点推移し、連動推移により「親子」ができる。これはSingle CFのプロセスになる (cf. (17c))。



なお複合語の意味と名前は必ずしも一致しない。例えばアメリカ大統領官邸を表すWhite Houseは、意味的には〈white〉+〈house〉ではない。whiteとhouse以外の特性部分(他の成員)で意味が規定されている。つまり命名は指示物が持つ意味をそのまま反映しているとは限らない。単に目立つ特性(成員)が、ラベル(名前)と置き換わる。そのため命名と意味は切り離して考える必要がある。

5.2 派生(Derivation)

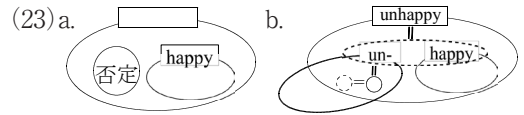
接頭辞または接尾辞を付加する派生を見ていく。例として(22)のようなものがある。

(22) a. 寒さ、強み、眠気、男っぽい、夏らしい、秋めく、映画化、大衆的、普遍性

b. sadness, skiing, bearded, civilize, donation, etc.

(影山 1997: 84)

例えばunhappyの場合、(23)に示すようなプロセスをとる。まず[否定]と〈happy〉を成員を持つカテゴリーが新たに作られる(23a)。否定を表



す成員は、それがun-のもつ成員(意味・条件)と同じと見なされ、un-に焦点推移する(Plural CF)。そしてラベルun-が成員の1つとなる。ラベルのun-とhappyがゲシュタルト化し、ラベルと同一化・焦点推移し、連動推移によりunhappyが生成される(Single CF: (23b))。このプロセスは接尾辞の場合も同じになる。またcoeducationalizationのように複数の接辞が付加されるものは内側から同じプロセスが繰り返し起こることで生成されていく。ここでも比喩のプロセスが働いている。

5.3 逆成(backformation)

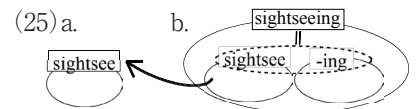
接辞と(誤って)分析されたものを基体から削除して語を作る〈逆成〉について見ていく。例としては(24)のような例がある。

(24) burglar→burgle, editor→edit, greedy→greed, difficulty→difficult,

unflappable→flappable, intuition→intuit, etc.

大石(1988: 219-221)

例えばsightseeingの場合、誤った分析に基づいて派生語の構造(〈sightsee〉+〈ing〉)を持つと考えられる(25b)。ただし(23a)のように〈ing〉の同一化した特性までは復元され



ず、成員が単に並ぶだけになる。そして成員の一つsightseeが分離し単独の語として生成されたと考えられる(25a)。つまり派生と逆成は反対のプロセスではあるが、(23a)のプロセスの有無で若干異なっている。

5.4 短縮 (clipping) と頭文字語 (acronym)

短縮は語の一部を省略してできる語である。語の中で目立った箇所が残し、それ以外が省略される。先頭、まん中、最後のいずれかが残る。例えば(26)のような例がある。これらは(17b)と同じプロセスになる。例えば (air) plane を図示すれば(27) のようになる。単語の音成員のうち目立つ plane の部分に焦点が当たりゲシュタルト化する。そしてラベルと同一化・焦点推移し、連動推移により、ラベルが plane と置き換わる (Single CF: (12) と同じプロセス)。

(26) a. [語頭] examination→exam, dormitory→dorm

b. [語中] influenza→flu, refrigerator→fridge

c. [語末] omnibus→bus, telephone→phone (竝木 1985: 166)



これと同じプロセスが、B.B.C., M.I.T., NATO, radar のような頭文字語にもおこる。違いは各単語の先頭文字に焦点があたることだけである*8。先頭文字が集められゲシュタルト化し、ラベルと同一化・焦点推移により、ラベルと置き換えられる。Single CFによる造語と考えられる。

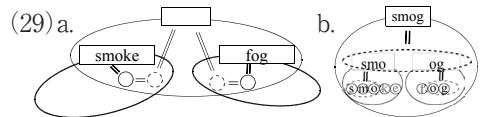
5.5 混成 (blending)

独立した2語の一部分ずつを混ぜ合わせることで、語を作り出す混成を見ていく。

(28) flash+gush→flush, smoke+fog→smog, breakfast+lunch→brunch, spoon+fork→

spork, Oxford+Cambridge→Oxbridge, helicopter+airport→heliport (影山 1997: 70)

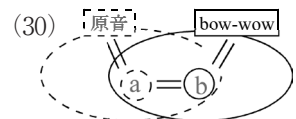
smogのプロセスを(29)に示す。まずカテゴリー〈smog〉と、カテゴリー〈smoke〉〈fog〉の特性が似ていることから同一化がおこり、成員から各ラベルへ



焦点推移が起こる。候補が複数なのでラベルと置き換わずに、成員に留まる。((29a): (16a)と同じプロセス)。次に各々が音のカテゴリーとなり、その中で目立つ成員がゲシュタルト化し、ラベルと同一化・焦点推移し、連動推移により各ラベルがsmoとogに置き換わる。そして両者が融合する形でゲシュタルト化し上位ラベルと同一化・焦点推移し、連動推移によりラベルsmogが生成される((29b))。つまりPlural CFとSingle CFの組み合わせにより、混成語は生成される。

5.6 擬音語 (Onomatopoeia)

オノマトペは現実の音をまねたり、動作の様態や肉体的あるいは精神的な状態を表すための語になる。前者を擬音オノマトペ、後者を擬態オノマトペと呼ばれる (田守・スコウラップ 1999: 10)。これらはカテゴリーの種類が異なるだけで、どちらも同じプロセスを経ると考える。bow-wowを例にとり簡略化した形で示したものが(30)である。原音(a)が似ていると感じられる言語音(b)と同一化する。言語音b (bow-wow) がラベルと同一化・焦点推移し、連動推移により原音ラベルがbow-wowに置き換わる。しかし実際には原音1=bow, 原音2=wow、さらにはもっと細かく対応しているとも考えられるが、各々が同じプロセスを踏み、(29b)のようにゲシュタルト化し、上位ラベルと同一化・焦点推移が起こる。よって擬音語においても同様に命名プロセスが働くと考えられる。



6. まとめ

本稿は緒方(2012)を補う論考として、命名プロセスのうち成員特定の部分を中心に考察した。そ

して成員特定の多様性を示すために、ニックネームを考察した。さらに語形成もまた命名の一種と考え、比喩のプロセス(同一化と焦点推移)による説明を試みた。ここでは通例の比喩と異なり、連動推移という操作が必要であった。とはいえ語形成のすべてのパターンについて論じたわけではない。とりわけ動詞・副詞・形容詞に関わる部分は扱わなかった。今後の課題としていきたい。

注

- *¹ 商品名は固有名詞ではあるが、数多くの製品を持つ。つまり固有名詞であっても普通のカテゴリーになりうるし、もっと言えばフレームのカテゴリーになることがある。
- *² 命名はモノに対してだけとは限らないが、ここではモノを中心に考察していく。
- *³ 名前の90%が地名に由来するとの説もある(武光 1998: 36-37)。職業に由来するものもある。
- *⁴ 緒方(2011)では重なり部分をカテゴリーと見なし、cat Xと表記していたが、ここでの議論には直接関係しないので、省略している。
- *⁵ 成員間の同一化はむしろ、一組とは限らず、複数組ある場合もある。また単に成員間の同一化だけではなく、構造や関係などが同一視されることもある(cf. 緒方 2011: 124-126)。
- *⁶ ニックネームとあだ名は厳密には同じではない。もっと言えば愛称とも異なる。しかしここではこれらを厳密に区別せず、同じものとして使っていく。
- *⁷ 原著では「バリック」とあるが、おそらく「バリック」の誤植と思われる。
- *⁸ identity card→I.D., television→TVなど頭文字以外が取り出されることもあるが、この場合は単に目立つ要素が異なるからと考えられる。短縮と純粋な頭文字語の間に位置する感がある。

参考文献

- 出口顯. 1995.『名前のアルケオロジー』紀伊國屋書店.
- Hall, D. G. 1991. "Acquiring Proper Names for Familiar and Unfamiliar Animate Objects: Two-Year-Olds' Word-learning Biases", *Child Development* 62, 1442-1454.
- 今井むつみ、針生悦子. 2008.『レキシコンの構築:子どもはどのように語と概念を学んでいくのか』岩波書店.
- 影山太郎. 1997.「形態論とレキシコン」西光義弘編『英語学概論』47-96.くろしお出版.
- 河上誓作. 1992.「ニックネームの言語学」『成田義光教授還暦祝賀論文集』441-451. 英宝社.
- 森岡健二. 1977.「命名論」『言語生活(岩波講座日本語2)』203-248. 岩波書店.
- 竝木崇康. 1985.『語形成』大修館書店.
- 緒方隆文. 2011.「メタファー・シミリ・メトニミー・シネクドキ」『年報』第22号, 115-129.
- . 2012.「固有名詞のカテゴリー要件」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』第7号, 103-118.
- 大石強. 1988.『形態論』開拓社.
- 奥富敬之. 2004.『名字の歴史学』角川書店.
- 武光誠. 1998.『名字と日本人』文藝春秋.
- 田守育啓、ローレンス・スコウラップ. 1999.『オノマトペー形態と意味—』くろしお出版.
- Quine, W. V. O. 1960. *Word and Object*. MIT Press, Cambridge, Mass.
- . 1969. *Ontological Relativity and Other Essays*. Columbia University Press, New York.

(おがた たかふみ: 英語学科 教授)